

国立歴史民俗博物館の愉悦⑧

鏡・劍・玉(福岡市吉武高木遺跡三号木棺出土、復元複製)

原品:文化庁(福岡市博物館保管)、弥生時代中期初め(前4世紀)



二〇一九年三月に国立歴史民俗博物館(以下、歴博)の第一展示室(先史・古代)は、三七年ぶりに大規模なりニューアルを行った。この資料はその時、弥生時代の前半期を扱った「水田稲作のはじまり」をテーマとするコーナーに展示したものである。

福岡市西区吉武高木遺跡(以下、吉武)の木棺墓に葬られた死者に副葬されていた金属製の武器類と石製の玉類である。今から二四〇〇年ほど前の弥生中期初めのものである。

中央の上にある丸いものが、青銅製の鏡、その下に碧玉製の管玉、そして一番下に硬玉製の勾玉。これらの両側には、青銅製の武器が並んでいる。歴博に展示しているのは複製品で、本物は福岡市博物館に保管されている。

通常複製品は、型に樹脂を流し込んで作り、着色して仕上げるが、この武器類は鑄型に青銅を流し込んで作成した復元複製品である。そのため、色は本来の金属の色である、金色を

している。「青銅なのに金色?」と思われる読者もいるかと思うが、いわゆる青銅色は錆びた色なので、錆びる前は金色をしているのである。日本列島に住む倭人たちがはじめて目にした金属は、金色をしていたことを観客にも実感してもらうために、復元複製品を作ったというわけである。縄文人にとつて光り物と言えば黒曜石などの石しか見たことがなかったわけなので、初めて金属の光沢を目にした弥生人は、どんなに驚いたであろうか。

青銅は銅・スズ・鉛の合金だが、スズの量によつて金色と赤銅色(新品の一〇円玉の色)に分かれており、弥生後期の青銅器は赤銅色をしている。第一展示室テーマⅣ「倭の登場」には赤銅色に復元複製された銅矛や銅鐸が並んでいるので是非一度、ご覧いただきたい。

さて、この吉武の資料、鏡・劍・玉という組合せは、そう、日本最古の三種の神器とも言えるのである。鏡・劍・玉という宝器の組合せは、朝鮮半島の青銅器時代にルーツがある。しかも共通しているのは組合せだけではない。遺体のどこに添えるかまで共通しているのである。たとえば吉武の鏡と武器類は、体の左側の腰のあたりに、まず切っ先を足先に向けて二本の武器を置き、その上に鏡を重ねるもので、朝鮮半島のやり方と一致していた。

このことから、朝鮮半島南部の青銅器社会と、九州北部の弥生中期社会のあいだには、共通の規範のようなものが存在していたことがわかる。しかもこうした規範は、吉武の五〇〇年以上前から存在していた可能性がある。

吉武の武器には、使った時にできる欠けや汚れが見られないので、おそらく実戦用ではなく儀仗用であったと考えられる。有力者たちは、こうした儀仗用の武器と宝飾品をもつことを、一般人びとから認められていたことがわかる。九州北部地域以外で個人が宝器を持つことを許されるようになるのは、吉武の四〇〇年ぐらいあとになってからのことなので、いかに吉武の人びとが稀有な人びとだったかがわかるのである。